

『ヴェニスの商人』におけるポーシャ再考

野口 忠 昭

序

箱選びが終わると、自由奔放で迷いのない行動をとるポーシャという女性（人物）はシェイクスピアの作品のなかで異彩を放っている。父親の遺言通り、宿命の箱選びによって夫を決める。亡き父の定めたことに従順さを示したかと想うと、裁判の席では男装した判事として変更不可能な事案を根底から覆し、動かぬ証拠を携える原告を容赦なく犯罪者に仕立ててしまうほどの奇策と機知と度胸を備えている。夫となった男性に指輪を渡し、それをなくしたときは妻の私をなくすときと言って、その尻から渡した指輪をちゃっかり取り上げる。そして、変装を解いて女性に戻ると、あれは私、もう二度と指輪をなくさないでと、夫をからかい、自身と関わる人々が幸せになるようにと、周到な配慮を怠らない。案出した計画の実行と達成の度合いは自ずとポーシャの聡明さを観客に印象づけ、夫となるまえのバサーニオが親友のアントニオに語って聞かせる

<p>Her name is Portia, nothing undervalu'd To Cato's daughter, Brutus' Portia, Nor is the wide world ignorant of her worth, For the four winds blow in from every coast Renowned suitors, and her sunny locks Hang on her temples like a golden fleece, Which makes her seat of Belmont Colcho's strond, And as many Jasons come in quest of her (I. i. 165-72).</p>	<p>彼女の名前はポーシャ。ケイトーの娘、 ブルータスの妻ポーシャにも劣らず、 世間に彼女の価値を知らない者はいない。 四方から風に乗り、様々な国より 高名な求婚者がやってくる。輝く髪が 金の羊毛よろしく頭より垂れ、それゆえ ベルモントはコルキスの浜となり、ポーシャ めがけてイアソン達が続々とやってくる</p>
--	--

というオヴィディウスを想わせる神話的な女性のイメージを醸し出す台詞と相俟って魅力に満ちあふれた人物と映る¹⁾。いかに声が悪かろうと (V. i. 113), その漂う魅力が観客の心を奪う。「父や夫への服従を守りつつ、自分の意志や個性を大胆自由に発揮する女—ポーシャの魅力はそこにあるといえよう」(Aoyama, 41) という青山の指摘する側面がポーシャにはある。また、ショーン・マキーヴォイ (Sean McEvoy) は、このような女性ポーシャの極めて有能な特徴を念頭に、「本作品は、一人の女性が極めて大きな力を与えられ、男達はこの女性にまんまと出し抜かれて

おろおろするという幕切れになっていると言える」(‘It can be argued that this is a play that ends with a woman very much empowered, while the men have been embarrassed and outwitted’ (McEvoy, 144).)と述べ、男性を翻弄し出し抜くあっぱれな人物としてポーシャを捉えている。

その好印象ゆえに、ヴェニスという商業貿易によって繁栄する国際色豊かで、人種の交わりと法の公正さを建て前とする都市 (III. iii. 26-31) において、夫に善かれと信じ、変装をした上で、ユダヤ人シャイロックに対しポーシャが行った裁判と下した判決とがどのような性質のものであったのか、問わせることを観客に放念させる。自由で奔放で男を凌駕するほど大胆なところに注意がとられ、ポーシャの行ないの真相が見えにくくなっている。²⁾

小論では、テキストを丹念に読み、フェミニズムの提示するポーシャ像を検討し³⁾、ポーシャが裁判で下した判決が、ユダヤ人シャイロックと男性中心のヴェニス社会にとって、どのような類の行為であったのかを突き止め、ポーシャの行ないの真相を明らかにして、フェミニズムの行なうポーシャ理解の誤りを明確にする。

1 ポーシャと結婚

「どうしてこうも気が滅入るのか分からない (I know not why I am so sad,/ It wearies me …)」(I. i. 1-2) というアントニオが開幕と同時に初めて口にするこのことばと似た、「私の小さき身はこの偉大な世界にうんざり (my little body is awearied of this great world)」(I. ii. 1-2) ということばをポーシャは登場早々侍女のネリサに対し口にする。しかし、「ご所有のあり余るほどの財産と同じく、難題も贅沢にあるというのでしたら、さぞうんざりでしょうとも…… (You would be …, if your miseries were in the same abundanace as your good fortunes are)」(I. ii. 3-4) というネリサのことばから窺えるように、ポーシャの倦怠感は、不幸のなかの難題ではない。「あり余るほどの財産」を相続する一方で、「私には好きな人を選ぶこともならないし、かといって、嫌いな人を拒むこともできない。生きている娘の意志は亡き父の遺書によって定められているというのですから (I may neither choose who I would, nor refuse who I dislike, so is the will of a living daughter curbed by the will of a dead father …)」(I. ii. 22-25) ということばから明らかなように、ポーシャには自らの意志によって夫を選べないという宿命が父親の遺志によって課されている。金、銀、鉛の三つの箱のうち、正しい箱を開けた者がポーシャの夫となるからである。彼女の結婚は社会制度の中心にいた亡き父親、父権社会の一員であった者の意志と遺志によって規定されている。

ポーシャの許へ、遺言に記された条件に従って箱選びをし、ポーシャを花嫁にすべく、幾人もの王侯貴族など社会的身分の高い求婚者が既に訪れている。「求婚者達の名前を挙げてみて (over-name them)」(I. ii. 35) というポーシャの要請に応えるネリサの口から出る者達の名前は、「ナポリ大公 (the Neapolitan prince)」(I. ii. 38), 「パラタイン伯爵 (the County Palatine)」(44), 「ル・ボン殿 (Monsieur Le Bon)」(52), 「フォルコンブリッジというイギリスの若い男爵 (Falconbridge, the young baron of England)」(64), 「スコットランドの貴族 (the Scottish lord)」(74), 「サクソニー公爵の甥 (the Duke of Saxony’s nephew)」(80) といったもので、既に六名が求婚に失敗している。いずれもポーシャのお眼鏡に適っていない人物達ばかりである。ネリサが

記憶から手繰りだした「かつて、モントフェラット侯爵と共にベルモントにお越しになられたヴェニスの学者で軍人 (a Venitian (a scholar and a soldier) that came hither in company of the Marquis of Montferrat)」(108-10) の「バサーニオ」(111) という男性は、「美しいご夫人に値する最良の方 (the best deserving a fair lady)」(113) としてポーシャもネリサ同様覚えている。バサーニオが唯一例外的にポーシャの関心を惹いている。

ネリサが名前を挙げた、求婚に失敗した男性達に悪評を下したポーシャが、バサーニオには好感を抱いていることが観客の前に明らかとなったあと、箱選びに失敗した四人の者達がポーシャに別れを告げようとする、モロッコ大公が使者を遣わし、ポーシャから箱選びの許可を得る (I. ii. 121)。

アントニオがバサーニオのためにシャイロックから三千ダカットの金銭を三ヶ月の期限付きで借り、「三千ダカットは、お前の仇に貸すと想え、その借りる仇が返済の約束を果たせないとすれば、堂々と私に罰を求めればよからう (lend it rather to thine enemy, / Who if he break, thou may'st with better face / Exact the penalty)」(I. iii. 130-32) ときっぱり言う場面において、モロッコ大公が箱選びをする場が続く (II. i)。

ポーシャと共に、箱選びの部屋に入ったモロッコ大公は、自分の肌の色に先ず言及する。

Mislike me not for my complexion,	眩しく輝く太陽が焦がした痕がある肌,
The shadowed livery of the burnish'd sun,	その色のせいで私を嫌わないで戴きたい。太陽の
To whom I am a neighbour, and near bred.	そばにいて、また、そのそばで育ったのですから。

(II. I. 1-3)

モロッコ大公は、自身の容貌が勇者には恐怖を惹き起こし、国では容姿端麗な乙女達が恋い焦がれるものだと、己の容貌を誇示してみせる。大公が妻に迎えたいと願うポーシャの情愛を盗み取るためではなく、肌の色を変えたいなどとは想わぬと言うが (II. i. 11-12)、ムーア人としての肌の色に引け目を感じていることが上の引用からはっきりしている。モロッコ大公が抱く肌の色からくる一種の劣等感、イタリアはベルモントのポーシャの肌の色をした人種との間に肌の色ゆえの識別と差別のあることを語り出している。

ヴェニスにおけるシャイロックの召し使いランスロット・ゴボー (II. ii)、ベルモントに行くバサーニオとグラシアーノ (II. ii; II. vi)、シャイロックの娘ジェシカ (II. iii; II. v) と駆け落ちし、ベルモントへ逃れることになるロレンゾなどの状況 (II. iv) がどのように推移しているかが明かされたあと、モロッコ大公が箱選びのため再び登場する。金、銀、鉛の三つの箱を一通り検分すると、金の箱を開け、なかに収められていた頭蓋骨と書き物とに気付く。そうして、その場を立ち去る (II. vii. 77)。それを受けて、ポーシャは「平穩に厄介払いができました。さあ、カーテンを引いて。あの方のような肌の色をした人には、こんな風に願いたいわ (A gentle riddance, — draw the curtains, go, — / Let all of his complexion choose me so)」(II. vii. 78-79) と安堵する。

ポーシャの好む男性は、モロッコ大公の肌の色を帯びない男性であることが観客に明白となり、観客はポーシャを肌の色を明確に意識した男性嗜好をする女性として認識する。

ベルモントにやってくる次の求婚者は、アラゴン大公。ポーシャの案内で箱選びの部屋に入る

と、ポーシャから箱選びの要点と箱選びに失敗したときのことを説明される。三つの誓約（どの箱を選んだか他人に漏らさないこと。正しい箱を選び損なった場合には、結婚前の女性に求婚をしないこと。箱選びに失敗したら、すぐさまベルモントを立ち去ること）を確認し、怯むことなく箱の前に立つ。アラゴン大公は、銀の箱を選ぶ。なかにはポーシャとは似ても似つかぬ阿呆の絵とことばの記された紙が見える。アラゴン大公はベルモントを立ち去る（II. ix. 78）。

この直後、以前に一度ベルモントを訪れたというヴェニス青年が門のところに到着したと、召し使いがポーシャの許へ伝えにくる。バサーニオを「見目麗しき恋の使い（So likely an ambassador of love）」（II. ix. 92）と召し使いが形容すると、ポーシャとネリサはそれが誰であるかを推察し、二人は有頂天になる（II. ix. 85-101）。バサーニオに対するポーシャの態度は、モロッコ大公やアラゴン大公に対するそれとは桁はずれに違っている。このことは観客の目に明らかである。ポーシャの男性嗜好はこれら三人に対する態度に現れている。

バサーニオが箱選びにより、ポーシャを妻とするため到着したことが分かると、ポーシャはバサーニオに何とか箱選びの瞬間を一日ないし二日、あるいは、一、二ヶ月先に延ばし、自分と一緒に時を過ごしてほしいとねだる。バサーニオが好きだというあからさまな意志表示を行うポーシャのこのような男性に対する積極性は、モロッコ大公やアラゴン大公に対しては決して見られなかったことである。

I pray you tarry, pause a day or two
Before you hazard, for in choosing wrong
I lose your company; therefore forbear a while, —
(III. ii. 1-3)

お願い遅らせて。選ぶまで一日、二日間をおいて下さい。選び損ねることがあれば、一緒にいられなくなります。ですから少し待って。

… I could teach you
How to choose right, but then I am forsworn,
So will I never be, — so may you miss me, —
But if you do, you'll make me wish a sin,
That I had been forsworn. (III. ii. 10-14)

どれを選べばよいか教えて差し上げることもできます。でもそれだと誓いを破ることになります。それはできません。そうすると選び損なうかも。あなたが選び損なったら、いっそ誓いを破ればよかったなどと罪になることを想うでしょう。

「(箱選びを待って下されば) どれを選べばよいか教えて差し上げることもできます」ということは、バサーニオに対するポーシャの想い入れの深さと、どうしてもバサーニオを自分の夫にしたいという想いを具象化したものである。しかし、それは箱選びの約束事に背く行為だとして、実行には移さない（III. ii. 11）。

バサーニオが箱選びをする前のほんの短い時間に、二人は正に熱く愛しあう恋人としてことばを交わしている（III. ii. 1-41）。ポーシャの熱い想いは、箱選びを前にした恋人に特別な配慮を示す。他の求婚者には決して行わなかったであろうことを、夫にと希求するバサーニオに対しては、平然と行ってしまふ。「あの方が箱選びをされる間は音楽を奏でるのよ（Let music sound while he doth make his choice）」（III. ii. 43）と言って、

<i>Tell me where is Fancy bred,</i>	教えて、恋はどこで育つの
<i>Or in the heart, or in the head?</i>	胸、それとも、頭
<i>How begot, how nourished?</i>	どのように生まれ、どのように大きくなるの
All. <i>Reply, reply.</i>	全員 答えて、答えて
<i>It is engend'ed in the eyes,</i>	恋は眼に生じ
<i>With gazing fed, and Fancy dies</i>	熱い視線で育つ。恋は
<i>In the cradle where it lies:</i>	入っている揺り籠のなかで息絶える
<i>Let us all ring Fancy's knell.</i>	恋を弔う鐘を打ちましょう
<i>I'll begin it. Ding, dong, bell.</i>	私から。ご〜んご〜んご〜ん
All. <i>Ding, dong, bell.</i>	全員 ご〜んご〜んご〜ん

という歌を、ポーシャは箱選びをするバサーニオのために歌わせる。この歌が終わるとバサーニオは「従って、外見は本質からもっともかけ離れているのかもしれない。一世間はいつも飾りに欺かれるもの（So may the outward shows be least themselves, — / The world is still deceiv'd with ornament —）」(III. ii. 73-74) とひとりごちる。

ジョン・ラッセル・ブラウン（John Russell Brown）は編纂したアーデン版（1954）において、歌と接続副詞‘So’の箇所のために脚注を設け、ポーシャが用意したこの歌が、どの箱を選べばよいかをバサーニオに教えているという見解を提示した研究者のいたことを註している（ブラウン編アーデン版、pp. 78, 80）。ブラウン自身は、そのような見解には与せず、ポーシャの夫は彼女が求める通り箱選びによって与えられるという神話的な見解を提示している。「父君は善良な方でした。そのようなもったいない方々が死に臨まれるときには、素晴らしいひらめきがあるというもの（Your father was ever virtuous, and holy men at their death have good inspirations...）」(I. ii. 27-28), 「大昔からの言い伝えは間違っはおりません。絞首刑と妻選びは宿命的なもの（The ancient saying is no heresy, / Hanging and wiving goes by destiny）」(II. ix. 83-84) というネリサのことは、「私を本当に愛して下さるなら、私を見つけて下さるはずです（If you do love me, you will find me out）」(III. ii. 41) というポーシャのことはなどにその根拠を求めている。

喜志は大修館シェイクスピア双書の『ヴェニスの商人』において、‘So’に対註を施し、「バサーニオは歌がどの箱を選ぶべきかをひそかに教えていることを理解してこう言うのだと説く批評家もいるが、黙って考えていた（‘comments ... to himself’ というト書きがある）ことを踏まえてこの語を発すると解した方がいい。」とし、歌がバサーニオに箱選びのヒントとなっていないという理解を示している（Kishi, 135）。

喜志とは異なり、ニュー・ケンブリッジ版（1926）の編者ジョン・ドーヴァー・ウィルソン（John Dover Wilson）はポーシャの用意した歌に関し巻末註を施している（Wilson, 149-150）。ウィルソンは、この歌に関心を払った先行研究（J. Weiss, *Wit, Humour, and Shakespeare* (1876)）や Arthur Wilson Verity を踏まえたリッチモンド・ノーブル（1923）及び A. H. フォックス＝スト

ラングウェイズの考えを紹介しながら、バサーニオがこの歌からヒントを得て箱選びに臨んでおり、接続副詞‘So’で始まる「従って、外見は……」というバサーニオのことばはこの歌の内容を受けているとする。第一連の行末三ヶ所 (bred, head, nourished), 第二連の最初二行のなかごろにある二つの単語の終わり方 (engend' red, fed) はフォックス = ストラングウェイズの指摘の通り、三つの箱のなかの鉛 (lead) の箱をバサーニオにすぐさま想起させる。更に、ウィルソン自身の考えとして、第二連の「恋を申う鐘を打ちましょう、私から。ご〜んご〜んご〜ん」にある申いの鐘、そして、「入っている揺り籠のなかで息絶える」恋は、当時の無名の墓に用いられたろうびき布 (cercloth) を取り巻いていた鉛を暗示しているとし、エリザベス朝当時の観客にはそれらのことが分かっていたという見解を示している。

ポーシャはどうしてバサーニオだけに歌を聞かせたのか。バサーニオがベルモントにあるポーシャの館に到着するのは、アラゴン大公が箱選びに失敗した直後だった (II. ix. 86-)。バサーニオはその後左程の時間をおかず箱選びの部屋に案内されている (III. ii. 1-)。その短い時間は遠方からやってきたバサーニオを迎えもてなす時間に費やされていることがポーシャとバサーニオとのやりとりから明らかである。既に触れたように、二人が熱く愛しあう恋人としてことばを交わしたあと、バサーニオは箱選びを始めようとする。音楽と歌の内容はバサーニオが箱選びを始める前に用意されている。このことより、ポーシャがこの特別な扱いの手はずを前以って整えていたことが容易に推測される。つまり、ポーシャが夫にしたいと想う男性が現れたときのために、箱選びのヒントを、夫にしたいと想う男性にどのように提供するかを総て前もって考えていたということが観客には見えてくる。「(箱選びを待って下されば) どれを選べばよいか教えて差し上げることが出来ます」とまで言うポーシャを考えると、夫にしたいと想う男性を獲得し、箱選びがもたらすかもしれない望まぬ男性から逃れるために、やってはいけないことを自分の望みを叶えるためにやってしまうかもしれないポーシャが観客には見えてくるのではないか。そして、歌のなかに隠された鉛と関わるヒントは、ことわざや神話の信憑性を凌駕し、ポーシャ (とネリサ) による操作が現実に行われたことを強く観客に印象づける。

既に触れたように、バサーニオは、ポーシャの父親が存命中にベルモントを訪れている (I. ii. 108-15)。ネリサの記憶は、バサーニオが「学者で軍人 (a scholar and a soldier)」であったと語っている。歌から得たと判断されるヒントを念頭に、バサーニオは身につけた古典の教養を見せかけと実際という主題と関わらせ披露する。そして、歌が提供した押韻と共通する鉛 (lead) の箱を選ぶ。

2 望む男性を夫にできたポーシャとその夫が抱えていた問題

アラゴン大公が箱選びに失敗した直後 (II. ix. 86-)、バサーニオがベルモントに到着する。その時点で、シャイロックからアントニオがバサーニオのために借りた3千ダカットの返済期限 (3ヶ月) が過ぎていく。バサーニオの箱選びが終わると、ロレンゾ及びジェシカと共にバサーニオ宛の手紙を携えてヴェニスより到着したサレリオが、アントニオの商船は一隻も帰還せず、三千ダカットの金を貸したシャイロックがヴェニス公爵を初め、その他の要人の説得に耳を貸さず、

借金の形にとったアントニオの肉一ポンド、すなわち、彼の命が風前の灯であることを伝える。

サレリオから受けとった手紙を読み、バサーニオは顔色を失う。その様子に注意を払っていたポーシャは、結ばれることになった夫バサーニオにその原因はと尋ね、結ばれることになった夫のために難題解決に臨もうとし、金銭を惜しまない。シャイロックからアントニオが借りている三千ダカットを「たったそれぼっちですの。貸した者には六千ダカット払って、証文をなかつたものにすればよろしいでしょう。六千を二倍にして、その二倍したものを三倍にして払えばいいのです」(III. ii. 297-299)とポーシャはいう。そして、夫を確実に自分のものとするため、教会にいて正式な結婚式を挙げてから渦中の友人の許へ行かれよと勧める(302-03)。

ポーシャは、夫バサーニオの間接的な借金に対し、妻である自分が遺産として相続した金銭を惜しみなく用いて返済をするよう許可を出す。そのことを、「あなたは一枚をはたいて買った方ですから、心より愛します(Since you are dear bought, I will love you dear)」(III. ii. 312)と言うが、男性中心の父権制社会ではあるが、結婚するまで抱いていたポーシャの経済的優越の意識が言わしめたことばと観客は理解する。つまり、予期しない夫の抱えていた問題を解決するために惜しみなく大金を使うのだから、惜しみなく夫を愛さないでおくものですかという一種の愛の告白をし、のろけているのだ。しかし、このことばからすると、金銭と引き換えにバサーニオがポーシャに所有されるということの意味し、意識の上では、男性と女性の社会的な文脈における所有関係が逆転してしまっていることが、観客の理解するところとなる。「私の財産はなくなりました(My state was nothing)」(III. ii. 258)と言った通り、持たざるバサーニオは男である自分をポーシャが所有しているという意識を抱かせ、そう告白することによって妻であるポーシャの相続していた財産を己のものとして使う許可を得る。バサーニオの抱える不利な経済状況ゆえに、父権制社会の常識を覆してしまっているポーシャのあり方は、本作品中における人物としてのポーシャの存在感を大きくし、かつ、どんなことでもできる力を獲得した特別な存在として観客に迫ってくる。カレン・ニューマン(Karen Newman)は

Shakespeare evokes here the accepted codes of feminine behavior in his culture, thereby distancing the action from the codes of dramatic comedy that permit masculine disguise, female dominace, and linguistic power. Portia evokes the ideal of a proper Renaissance lady and then transgresses it; she becomes an unruly woman (Newman, 29).

と述べ、シェイクスピアが貞淑さの裏に隠された、当時の文化のなかにあった、経済的力によって男を支配しようとする傾向がポーシャにはあり、男を凌駕しようとするポーシャ像を提示していると指摘する。

箱選びという手段によってしか夫を選べなかった状況をやっと抜け出し、心より結ばれたいと願った男性を夫にできたという嬉しさと、その後の生き方に希望と期待とを賭ける意気込みを見せるポーシャは一刻も早く夫を難題から解放し、「あなたには、とり乱した心で新妻のポーシャと枕を並べて戴いてはこまりますから(For never shall you lie by Portia's side/ With an unquiet soul)」(III. ii. 304-05)と言う台詞にあるように、望み通りの夫と二人で幸せな結婚生活を送りたいと希求する。

そのような強い想いを抱いているポーシャが夫のために何かできないかと考えているのは、ヴェニスにいるアントニオと関わる場をおいた次の場においてである。バサーニオの親友アントニオが監獄の看守に付き添われ、シャイロックのあとについて何とか慈悲を乞うため獄舎から出てきている。慈悲を乞うのも無駄だと分かり、そばにいたソラニオに応え、「公爵には（ヴェニスの）法を退けたりすることはできない。ヴェニスの貿易と利益が様々な民族のお陰であるからには、外国人と我々市民とが共有している便宜が拒絶されると、国家の法のあり方が咎められることになるからさ（The duke cannot deny the course of law:/ For the commodity that strangers have/ With us in Venice, if it be denied,/ Will much impeach the justice of the state,/ Since that the trade and profit of the city/ Consisteth of all nations）」(III. iii. 26-31)と、死を覚悟し、最後の願いとして、友人のための借りを返す自分の姿をバサーニオに見てほしいとアントニオは祈る。

この次の場に登場するポーシャは夫との幸せな生活を願い、既に一計を案じている(III. iv)。夫をヴェニスに行かせたポーシャはその計画を実行すべくパデュアに棲む親戚のベラリオ博士の許へバルサーザを使者に立て、事情を説明した手紙を届けさせる。博士からは書面と服を受け取らせ、ヴェニスへ渡る船着き場へ届けさせるよう手はずを整える。ポーシャは侍女のネリサと共に男装をし、馬車にてヴェニスへと旅発つ(III. iv. 310)。

3 男装のポーシャとユダヤ人シャイロック、法を逸脱した裁判

裁判の法廷にヴェニス公爵が出席している。公爵は、被告のアントニオに、「お前を気の毒に思うぞ」(IV. i. 3)と言い、アントニオに同情を寄せる。原告のシャイロックが法廷に現れると、世間も私もお前がアントニオに慈悲を垂れるべきだと考えていると再度被告を擁護し、原告の反応を待つ。再三に渡るこのような説得に対し、シャイロックは証文に記されている貸した金子と責任とに言及し、それを認めないのなら、ヴェニスの明文化された権利も自由も危機に瀕することになる。アントニオを裁きの席につけるのは気紛れからだと思え、復讐という分かり切った理由は述べない(IV. i. 37-43)。アントニオは暖簾に腕押しとばかりに、ヴェニス公爵に判決を仰ぎ、シャイロックの望みを叶えるよう、意志表示をする(IV. i. 71-83)。ベルモントから駆けつけたこの訴訟の発端であるバサーニオがポーシャから得た六千ダカットをもって、借りた金を二倍にして返すからと説得しても、シャイロックは受けつけない。金で買った奴隷を自由の身にしてやれ、家の跡継ぎと結婚させてやれ、どうして奴隷を酷使するのか、自分達の寝るのと同じ柔らかい布団を用意してやればよかるうに、などと私がもちかけても、お前さん達は、金で買った奴隷は我々のもの、我々の自由にすると答えるだろう。私もそうだと断って、シャイロックは公爵に判決を要求する。すると、公爵は職権を行使し、本案件の決着を任せてあるベラリオ博士が今日法廷に現れなければ閉廷だという(IV. i. 104-07)。

これは公爵が、法に従えばユダヤの異邦人シャイロックが正しく、被告アントニオは胸の肉一ポンドを原告に差し出さなくてはならないということを充分理解した現実逃避の行為であると観客には映る。自分ではその分かり切った判決をどうしても下したくないので、他人任せの裁判をすることにしてしまったのだ。ベラリオという博学の判事も単純明解な訴訟に対しては、アント

ニオのヴェニスの法と関わる台詞（III. iii.26-31）から推して、公爵と同様の判決しか下せないことは自明の理である。父権制社会の基盤である法をその中心にいて実施するはずの存在が、その法を蔑ろにすることはできない。そこで、公爵は理の世界から情の世界へと話しを移し、事のすりかえを図ろうとしたのだが、上手くゆかず、公爵はお手上げ状態なのである。異邦人シャイロックのごとく人種差別を受け続けてきた人間に、情に照らして、ユダヤ人差別を行いま⁴⁾た今後も同じく差別を続けると公言（I. iii. 101-26）した人間を許せと言っても無理なのである。一部始終を目撃していた当時の観客にシャイロックの言う意味が分からなかったであろうか。

ヴェニス公爵が自ら裁判を放棄し、他人任せの裁判をしようとしていることが観客に明らかとなる。そこへ、男装したネリサが入り、パデュアのベラリオからの手紙を公爵に渡す（IV. i. 120）。法廷で公爵が読み上げるその手紙には、バルサザーという名前のローマに棲む若い老成した博士にユダヤ人とヴェニスの商人との争いを一任したということが記されている。アントニオとシャイロックのやりとりから本テキストには、明確にユダヤ人差別の問題が扱われていると言える。

ベラリオに代わって男として入廷した女性の判事ポーシャ/バルサザーは、望んだ夫のためにその友人を危機から救い出すという命題を至上とし、その視点より原告シャイロックに臨んでいる。つまり、ポーシャは自らの書いたシナリオを演じるために、女性には決して許されていない裁判官という男役を自分に与え、架空の世界、現実から遊離した世界で現実の問題を裁こうとしているのである。箱選びに恣意的な操作を加えて手に入れた欲望の顕現バサーニオのために法廷で最高の権力を賦与されている男役を演じ、自ら書いたシナリオに記された目的成就のために力を尽くそうとしている。男装の下に女性の欲望を隠した判事の行なう、端から公正さなど期待できない裁判の幕が開いたと言える。そして、ユダヤ人が促す方向に進まなくなると、夫の親友の救出とユダヤ人に対するいびりと欺瞞と排斥へと裁判は収斂する。観客がここで思い出してよいことは、ポーシャがモロッコ大公を肌の色ゆえに拒絶し（II. vii. 78-9）、差別する人間、公正さを持ち合わせていない人物であるということである。

判事ポーシャ/バルサザーは慈悲を拒絶したシャイロックに、慈悲を垂れよと迫る。

The quality of mercy is not strain'd,	慈悲は強いられて垂れる類のものではない。
It droppeth as the gentle rain from heaven	慈しみ深い雨のように地上へと
Upon the place beneath: ... (IV. i. 180-82)	天より降るもの。

と、ポーシャは、申命記32章2節（Deuteronomy）、などを想起させることばを初め、「正義に慈悲を加味すれば、地上の力は神の力さながら (... earthly power doth then show likest God's/ When mercy seasons justice)」(IV. i. 192-30) という一節と関わっては、詩編143章2節（And enter not into judgment with thy servant: / For in thy sight shall no man living be justified）など、ユダヤの民も知る旧約聖書からのことばを並べる。そして、目の前の裁判官が自分のために演じ狂言している妻とは知らず、「お願いですから、裁判官の権威で法を曲げて戴きたい (... I beseech you/ Wrest once the law to your authority)」(IV. i. 210-11) と、夫のバサーニオが陳情すると、法の執行と判決を求めるシャイロックを慮ったと言わんばかりに、すかさず、裁判官ポーシャは「ヴェ

ニスには定まった法律を変える力は存在しない。これを先例として書き留める。そうすれば、本事例に照らして今後の過ちが多く正されよう（there is no power in Venice/ Can alter a decree established:/ 'Twill be recorded for a precedent,/ And many an error by the same example/ Will rush into the state...）」（IV. i. 214-18）と、夫を冷たく退け、シャイロックに「聡明な裁判官ダニエルの裁きだ（A Daniel come to judgment）」（219）と言わしめ、彼を有頂天にさせる。再度慈悲を垂れよと言うポーシャに対し、原告シャイロックは証文を盾に判決を求め、被告アントニオ自身も判決を促す。

裁判官に辞世のことばをとわれ、アントニオはバサーニオにどれほど友情を感じていたか、その親友がどのようにしてこの世の終わりを迎えることになったかを、妻となった夫人に語ってほしいと依頼する。バサーニオも親友のことばに答え、「君を救うためなら、総てを失ってもいい、そうだ、この悪魔に何でも犠牲として捧げてもいいと想っている（I would lose all, ay sacrifice them all/ Here to this devil, to deliver you）」（282-83）と、ことばを返す。アントニオのためなら妻をも失ってよいという夫のことばに、妻であるポーシャは仮面の下から、「夫人がそれを聞かれたらありがたいとは思われないうに（Your wife would give you little thanks for that）」（284）と茶々を入れる。シャイロックの浮かれようや、夫のあたふたとする様子を愉しんだあと、ポーシャはシャイロックにアントニオの胸の肉一ポンドを切り落とすよう指示する。法が認めるのだという（298-99）。

夫ゆえのポーシャの「ユダヤ人いびり」はこの直後から本格的に始まる。証文には「肉一ポンド（a pound of flesh）」（304）とあるが「血は一滴もお前に許していない」（302）、「肉一ポンドを切りとる際に、キリスト教徒の血が一滴でも流れたなら、お前の土地や物は国の法に基づきヴェニスに没収されることになる（... in the cutting it, if thou dost shed/ One drop of Christian blood, thy lands and goods/ Are (by the laws of Venice) confiscate/ Unto the state of Venice.）」（IV. i. 305-08）。「それが法律なのか（Is that the law?）」（310）と、シャイロックが問うて不思議がないように、ポーシャのことばは法律ではなく、夫の親友を助けるための奇想に過ぎない。W. H. オーデン（W. H. Auden）は、'Brothers & Others'、において、'The pound of flesh story has a basis in historical fact for, according to the Law of the Twelve Tables, a defaulting debtor could be torn to pieces alive'（Auden, 226）と指摘し、ローマ12表法に負債を抱えた人間が肉を切り取られる根拠のあることに言及している。マーク・シェル（Marc Shell）も同様の指摘を行なっている（Shell, 66-7）。また、佐藤篤士は『改訂 LEX XII TABULARUM—12表法原文・邦訳および解説』において、十二表法第3表6が、「第3の開市日に彼らは（責任を負う者を）部分に切断せよ。多く切断しても、あるいは少なく切断しても、罪なきものとせよ」（Satoh, 59）と教えていることを明示している。但し、佐藤はその「解説」に「ローマの文献には、本条によって身体分割をした事例は述べられていない。このような苛酷な手続きを規定したのは、拘束行為と同じように債務不履行を一種の不法行為と考えていたのかも知れない。」と記している（Satoh, 60-1）。ともあれ、シャイロックの証文にあることが実行に移されてよい論拠が、ヴェニス（イギリス）の慣習法の基本となっていたローマ法の中にあることは確かである。

ポーシャの証文の字義解釈は、人肉を切った際の出血の有無に留まらない。肉は一ポンドきっかりでなくてはならないし、計りが髪の毛一本ほどの片寄りを見せただけでもシャイロックは死

刑になるという（IV. i. 321-28）。異邦人が直接間接を問わず、ヴェニス市民の命を狙ったということが分かった際には、その者の財産の半分は命を狙われた者のものとなり、残りの半分は国庫に没収されるというのであるが、ポーシャは、シャイロックにこれら総てを当て嵌め、彼の命と財産を取り上げると言うのである（345-57）。シャイロックの敗北が明白になったところで、公爵がポーシャの言に従い、「我々キリスト教徒の精神の違いをはっきりお前に見せるため、お前が命乞いをする前に赦してやろう（That thou shalt see the difference of our spirit/ I pardon thee thy life before thou ask it）」（364-65）と言って、公爵が、ヴェニスの市民アントニオの命を狙った廉で死刑が確定したシャイロックを赦すので、シャイロックは命拾いをする。また、アントニオが手にするシャイロックの財産の半分は、シャイロックが亡くなった時点で、娘のジェシカを連れ去った男性の手に入るようにされたいというアントニオの申し出によって、その財産が義理の息子と実の娘の許に渡るよう、シャイロックが遺書に相当する証文を書くことになる。アントニオは、更に、シャイロックがすぐにキリスト教に改宗するよう迫る（383）。この両の点について、ポーシャが「文句はないか（Art thou contented Jew?）」（389）と返事を促すと、「結構です（I am content）」（390）とシャイロックは答える。

うらぶれて法廷を出るシャイロックの姿が、裁判の始まる前の、彼の得意になった姿と好対照をなしていることに観客は気付く。キリスト教に改宗せよと強要されたシャイロックが法廷を出たあと向かうところは恐らく同じユダヤの血を引くテュバルの許であろう。そして、証文という動かしがたい証拠を無視して、ユダヤ人に対する迫害とも言える扱いをした裁判官ポーシャ/バルサザー、公爵、そして、その他のヴェニス市民のことを委細漏らさず伝えると推測される。シャイロックの正当性を擁護できるのは、キリスト教徒となってロレンゾと駆け落ちし父を捨てた娘のジェシカではなく、テュバルただ一人である。ヴェニスの法制度を弾劾できるのはこのテュバルただ一人であろうが、シャイロックの復権はありえない。

ポーシャは自ら書いたシナリオの目的成就のため男役の裁判官を演じ切ったのである。男装し、バルサザーという名前の法学に精通した人物として判事を務め、望んだ夫の親友を救うために全力を尽くし、難題解決後の幸せな結婚生活を始めることに一心なのである。ポーシャの行為は総てをその結婚生活に収斂させるためのものであったと言える。ポーシャの判決に異議ありとする観客は当時皆無であったのだろうか。

4 ユダヤ人差別と良心

ポーシャは、モロッコ大公が箱選びに失敗して立ち去ると、「あの方のような肌の色をした人には、こんな風に願いたいわ」（II. vii. 79）といてムーア人を夫にはしたくないということを明らかにしていた。これはポーシャの夫を選ぶ際の前提だったことは既に指摘した。誰もそうしてはいけないなどと言って、彼女の個人的な異性の好みを変更させたりはできないだろう。しかし、ヴェニスという国際都市に棲む市民と異邦人との法律上の関係については別の話であり、両者は対等なのである。このことは既にアントニオのことば（III. iii. 26-31）によって確認した。その法的な条件を逸脱した扱いをユダヤ人シャイロックに対して行ったポーシャは、民族差別を犯した

と言える。この行為は個人的な好みの問題ではなく、法制度や国家制度の問題であり、赦されざる行為である。

法廷の場で、シャイロックを擁護する人物を誰一人登場させていないシェイクスピアは、自国イギリスの社会を含め、作品中のヴェニスというキリスト教都市国家において、ユダヤの民を差別することは当然のこととして、この劇作品を書いたのだろうか。この問いを考えるために、道化でありシャイロックの召し使いとして二幕二場に登場するランスロット・ゴボーという人物を検討する⁵⁾。

登場すると、ランスロット・ゴボーは、さっそく、

... the fiend is at mine elbow, and tempts me, saying to me, "Gobbo, ... use your legs, take the start, run away." My conscience says ... "... honest Launcelot Gobbo, do not run, scorn running with thy heels." ... to be rul'd by my conscience, I should stay with the Jew my master, ... (II. ii. 2-9)

悪魔が私のそばにいて、こんな風に言って誘惑するんだ。「ゴボー、……お前の両足を使え、逃げろ、走って逃げるんだ」と。私の良心はこんな風に言うんだ。「正直者のランスロット・ゴボー、逃げたりするな、逃げることになど目もくれるな」と。……良心の言うことに従うとすれば、主人のユダヤ人の許にいて仕えるべきだが、……

などと言い、現在のユダヤの主人の許を逃げ出すべきか否か迷っている。この時点で、ランスロットは主人のシャイロックがアントニオに金を貸したということは知らない。なぜなら、このあと、父親が登場し、父親とともにバサーニオに出会い、そのバサーニオを主人として仕えたいと申し出、許しを得る際に、バサーニオがその日シャイロックと会ったことを知るからである (II. ii. 138-41)。従って、アントニオが三ヶ月の期限を守って三千ダカットをシャイロックに返済しなければ、シャイロックに対して、肉一ポンドを代わりに差し出すという借金の契約を交わしたことは知らないはずである。ランスロット・ゴボーがユダヤ人のシャイロックの許を逃げ出すための理由は、よって、他にあると考えられる。ランスロット・ゴボーは「主人のユダヤ人は正に悪魔の権化だ (the Jew is the very devil incarnation)」(II. ii. 26) と言っていることなどから察すると、アントニオと取り交した契約にある肉一ポンドと関わって逃げ出そうとしているのではなさそうである。つまり、ランスロット・ゴボーはユダヤ人の主人にひどい目にあわされ (II. ii. 125-26)、世間に見られるように、例えば、ジェシカに「父親の罪は子供に課されることになる (the sins of the father are to be laid upon the children ... you are not the Jew's daughter)」(III. v. 1-10) ということばに表れているように、ユダヤの民に対し偏見を抱き、それゆえに、主人の許から逃げ出そうとしていることが分かる。世間の行なうユダヤ人差別に巻き込まれているのである。結果的に、ランスロット・ゴボーは、バサーニオの召し使いになるので、彼は己の抱くユダヤの民への偏見に負けたことになる。

道化 (clown) であるランスロット・ゴボーは、登場して間もなく偶然父と出会い会話するところ (II. ii. 31-108) から分かるように、シャイロックのところに奉公している。ランスロットは目の不自由な父をかつごうとし、自分が出世したという嘘を言う (II. ii. 45)。このことから、ラ

ンスロットは当時の徒弟制度らしきものに組み込まれていることが読める。道化という社会的に宙に浮いた人物ではなく、社会の一員として働く、社会的機能を帯びた人物となっている(II. ii. 36-55)。従って、ランスロット・ゴボアの台詞は召使という役割を帯びた人物のことだと捉えることができる。ランスロットを道化としてよりも召使として捉え、その言動を考察する。

シェイクスピアは、その召し使いを「良心(conscience)」と「悪魔(fiend)」の板挟みにする。ランスロット・ゴボアの良心はユダヤ人の主人の許を離れるなど忠告するし、悪魔の方は、ユダヤ人の主人の許から逃げると誘惑するのだ。彼の良心は、つまりは、「私の良心はちょっと厳しい良心で、ユダヤの主人の許で仕えよと諭しているのだ(my conscience is but a kind of hard conscience, to offer to counsel me to stay with the Jew...)」(II. ii. 26-8)から明らかのように、ユダヤ人に対する差別を行ってはならないと教えているのである。

ランスロット・ゴボアの受けた教育は高いものとは言えず、彼の話すことばから、観客はそう判断する。frutify(II. ii. 127)をnotifyの意味で使ったり、reproach(II. v. 20; Schimidt: 'Misapplied to approach by Launcelot')をapproachの意味で使ったりしていることから、彼のマラプロピズムは明らかであり、そこから、道化としての役柄を帯びた人物と判断できるが、同時に、彼の教育に関しても判断することが可能である。当時の社会において、小姓(page)や取次(gentleman-usher)、そして、女官(lady-in-waiting)などの召使とは異なる、(ランスロットのような)召使は社会の最下層に位置していたとJeffrey L. Singmanは以下のように記している。

At the base of both the rural and urban hierarchies were the laborers and servants. In the country, there was need of shepherds, milkmaids, harvesters, and other hired hands; the towns required porters, watercarriers, and other unskilled workers. In the country, paid labor sometimes went to cottagers, but increasingly it fell to a growing class of mobile and rootless laborers who followed the market in search of employment...

... The relationship of servants to their employers in many ways resembled that of children to their parents. They were not just paid employees, but subordinate members of their employer's household who actually lived with the family. Servants might be in a better position than laborers, since service was often a temporary stage on the road to a better social position. Even aristocratic youths might spend some time as pages, gentlemen-ushers, or ladies-in-waiting in a prestigious household. Between the ages of 20 and 24, some 80% of men and 50% of women were servants; two-thirds of boys and three-quarters of girls went away from home in service from just before puberty until marriage, or a period of about 10 years (Singman, 15-6).

このような条件を帯びる人物ランスロット・ゴボアに、ユダヤ人に対する差別を行ってはならないという良心の声が聞こえているのだ。とすれば、社会的に恵まれ、この人物より高い教育を受け、また、社会的に高い地位にいる、例えば、ヴェニス公爵、バサーニオ、アントニオ、グラシアーノ、ポーシャなどにも当然、この種の良心が備わっていると観客は判断する。

既に見たように、社会的に高い身分のヴェニス公爵は、裁判において、シャイロックの正当性

を認めざるを得ないと考えている。シャイロックは、金を貸したことを証す証文を携えている。アントニオは約束通りに借金の返済ができず、証文に書かれた条件は、期日に遅れると胸の肉一ポンドを差し出すというものであった。ヴェニスという法秩序の中心にいる公爵は、自分の行動の道徳的な質について判断を行ない、心の内では自分の行ないの間違いをほとんど認めていたと言える。ランスロットの言う良心（II. ii. 1）を引用している *OED* が定義する「人の行動や動機の道徳的な質について判断する力ないし原則で、正しいことを認め、間違っただけを非難するもの（the faculty or principle which pronounces upon the moral quality of one's actions or motives, approving the right and condemning the wrong）」に照らし、自分の行なったことが正当性を持たないと判断していたと考えられるからである。公爵は良心の呵責を覚えていると言えよう。

しかし、十分に教育を受け正しい判断の下せるはずのポーシャ、バサニオ、グラシアーノ、サレリオ、ソラニオなどの人物達に、ランスロット・ゴボの経験する良心の呵責が全く見られないことを観客は認識する。つまり、社会の最下層にいるランスロットに良心が備わっているということから推論されることは、裁判を行なうポーシャは良心の訴えに、自分達の都合を優先し、全く耳を傾けなかったのだということである。ポーシャはシャイロックの証文を蔑ろにし、犯罪をでっちあげ、三幕三場26-31行のアントニオの台詞から判断して、ヴェニスの法律を侵し、ユダヤ人差別を犯したのであった。

ランスロットの良心は、ユダヤ人差別が当然であった時代と社会との中心に存在した人物達の行為が正しいかどうかを観客に判断させる倫理的物差となっている。その物差に照らすと、社会の上層に位置し、高い教育を受けたと判断されるポーシャや公爵が良心と相反する行為を行なってしまったこと、法を蔑ろにし、でっち上げを行ない、犯罪者でない者を犯罪者にするという、違法行為を行なったことが明らかとなる。この物差から、ヴェニスのキリスト教社会全体が犯罪を犯したことが見てとれる。

5 まとめ

ポーシャは自分の欲求を叶え、困っていた夫の親友のキリスト教徒を助けるために、社会的周縁に置かれたシャイロックに対し非道極まりない行為を行った。証文という証拠を無視し、ユダヤ人の権利を完全に蔑ろにし、シャイロックの財産を没収、挙げ句の果てに彼を犯罪者にまで仕立て上げた裁判と判決は一体何をもたらしたのだろうか。

架空の人物を演じ、目的を達成したポーシャは侍女のネリサと共に、夫との幸せな結婚生活を送るためベルモントへ帰ろうとするが、夫バサニオとネリサの夫グラシアーノとが裁判のお礼をしたいというので、箱選びのあと、夫に贈った指輪をもらうことにし、夫達を出し抜く芝居を更に続ける（IV. i. 423—IV. ii. 17）。

ベルモントでロレンゾとジェシカとが古代の神話上の恋人達のことを語りながら自分達の想いを伝え合っただけで愉しんでいる。そのロマンティックな雰囲気にならぬように音楽が聞こえてくる。その音楽と家の蠟燭の灯がポーシャとネリサとを出迎える（V. i. 89-100）。召し使い達に、自分達が出かけていたことを内密にしておくように、ネリサに指示を出させ（V. i. 118-20）、夫

達の帰りを待つ。親友のアントニオを連れて夫バサーニオとグラシアーノ達がベルモントに戻ってくる。ポーシャ達の男装のことを知らないバサーニオ達は、妻からももらった指輪を女性にやっってしまったという嫌疑を妻達からかけられ（V. i. 160-62; 208-210）、翻弄される。

夫達が寝取られ亭主になったのだと想わせておいて、夫達から取りあげたのと同じ指輪を、再度夫達に差し出し、持っていたベラリオからの手紙を見せ、ポーシャは、ヴェニスの法廷にいた裁判官が男装した自分であり、その秘書は男装したネリサであったことを明かす（254-72）。あっけにと取られているアントニオには、三隻の商船が無事宝を満載して帰還したことを伝え、その事実を伝える手紙を渡す（275-79）。二人の男装のことを知っているロレンゾとジェシカには、義理の父シャイロックの死後、残される財産総てを引き継がせるということが記された遺産譲渡の証文を与える（288-93）。ベルモントの三組のカップルは一気に幸せな雰囲気にもまれる。夫達が指輪の教訓を想い出し朝を迎えるベルモントにいる者達は全員恵まれた状況に至り、芝居は終わる。

自身にとって近い他の者に対し恵みをもたらし、驚きと暴露によってベルモントにいる誰もが幸せな境地にいられるように、「ポーシャは贈り物を与える者である（…Portia is the gift-giver）」（Newman, 26）とニューマンが指摘するように、ポーシャは与える主体となっている。しかし、このポーシャの与える恵みは、ユダヤの異邦人シャイロックの権利を奪った結果生まれたものなのである。公爵にはヴェニスの為政者としての尊厳を引き続き与え、シャイロックの証文から生じるユダヤ人の法的な権利と財産を奪うことによって、アントニオに命を与え、バサーニオとグラシアーノには友人のアントニオとその借金から生まれた難題からの自由を与え、ロレンゾとジェシカには遺産譲渡の証文を与える。侍女のネリサには、夫グラシアーノの妻に対する益々の愛情と約束を与える。夫のバサーニオには親友と社会的面目を、自らには、難題から抜け出た夫と約束されていると確信する結婚生活を与える。

総てを円く収めたと想われる女性ポーシャのこの法を逸脱した無礼講的行為は、男性が父権を優先させて築いてきた社会の法律、制度、秩序を破壊するのではなく、その正当性の回復と更なる存続とを許したのである。キリスト教父権社会ヴェニスを中心であった公爵は、シャイロックと関わる裁判を放棄し、父権社会の法の体現者の資格を失っていた。その失格していた人物を何の試練も経させないまま、ヴェニス社会の中心へと再び返り咲かせたのである。キリスト教社会のなかで、経済的な主導権を握っていたと想われる、負債を抱えたアントニオを何の足枷もはめないまま無償で復帰させ、それによって、アントニオの友人達にも以前と同様、ユダヤの異邦人をあからさまに差別し排斥するキリスト教男性中心の社会を維持（IV. i.360-3）させることとなった。シャイロックに対しては、社会の周縁に置かれ、常に他者として扱われるユダヤ人の社会的権利が認められる、裁判という絶好の機会を完全に台無しにしたのであった。ポーシャは、本質的に、フェミニストの最も好まぬ行為を行なったのである。

良心の片鱗すら見せないポーシャは、ベルモントにおける父権制の象徴である父親の遺志によって規定されていた、夫選びの手立てである箱選びの際、バサーニオに禁じられているヒントを与え、正しい箱を選ばせる（III. ii.43-77）。やっとな願の男性を夫にでき、欲求が叶うと、夫のために理非曲直を省みず己を捧げてしまう。自由奔放で迷いのない大胆な行動をとり、一見公正無私な態度で裁判を行なうように見えるポーシャではあるが、作品を丁寧に読み進むと、社会の最下層にいる召使の良心すら持ち合わせていない彼女の行ないの不当性がはつきりする。反省と修正

を強いられて当然のヴェニス社会の中心にいる男性達が、もがき抜け道を模索しているとき、法と次元を跳び超え行動した女性ポーシャはキリスト教父権制国家のために進んで利用されたと言えるのではないだろうか。

ユダヤ人差別の言説が根底にあるテキストを男対女というジェンダーの言説にすり替えたフェミニズムの、テキストとポーシャの理解は本作の読み方を誤った方向に導いたと言える。そして、その理解はシェイクスピアの提示している問題の在り処を見えなくさせていると言いうる。

ポーシャの行ないの真相を把握し、召使ランスロット・ゴボアの良心の意義を理解すると、作者シェイクスピアがユダヤの異邦人シャイロックに対する社会的・人種的差別を倫理的に赦されざる行為であると考えていたことが読み取れよう。⁶⁾

註

- 1) 青山誠子はオヴィディウスの『変身譚』に登場する魔女メディアとポーシャとをシェイクスピアが互いに関連させ合ったことに言及し、その理由はポーシャを「愛のロマンスのヒロインとして、あるいはキリスト教的な慈悲の化身として理想化」(Aoyama, 39)せず、「矛盾をもつ生身の女としての魅力を豊かに描き出すため」(Aoyama, 39)だったのではないかと言ひ、シェイクスピアがオヴィディウスをポーシャの神話的側面ではなく現実的側面を創り出すために用いたことを指摘している。

Jonathan Bate は *Shakespeare and Ovid* において、

The capacity of Ovidian allusion to destabilize comedy's march to harmony is further demonstrable from *The Merchant of Venice* (Bate, 151).

とし、オヴィディウスは喜劇である『ヴェニスの商人』が喜劇の主題である調和へと至らせるのを阻む要因になっていると主張している。

- 2) ポーシャを男性中心社会との関わりで、特別な才覚を発揮し英雄的な人物として捉えるのはフェミニズム批評の代表、Karen Newman と Lynda Booth である。両者のポーシャに関わる見解は、それぞれの批評家の論からの以下の引用に表れている。

I have therefore argued that the *Merchant* interrogates the Elizabethan sex/gender system and resists the “traffic in women,” because in early modern England a woman occupying the position of a Big Man, or a lawyer in a Renaissance Venetian courtroom, or the lord of Belmont, is not the same as a man doing so. For a woman, such behavior is a form of simulation, a confusion that elides the conventional poles of sexual difference by denaturalizing gender-coded behaviors; such simulation perverts authorized systems of gender and power. It is inversion with a difference (Newman, 33).

... as a dramatist working within a form that implicitly demands gratification of his audience's privileges and prejudices, Shakespeare created in “fair Portia” an ideal adjudicator to mete out the play's paradoxical combination of a justice that is distributively retributive. ...’ (Boose, 250).

ブースもニューマンも、ポーシャの行いを正当化し、ポーシャの行なったユダヤ人シャイロックに対する裁判には何の問題もなかったと考えていることが分かる。

- 3) 小考の批評的立場は、作品に焦点を当て、そこから見えてくるシェイクスピアの思想的神髄を読み解こうとするものである。時流にのった批評傾向や主義に与して習い、そのような立場から見えるも

のを追求しようとはしていない。テキストに向き合い、テキストの教えることに耳を傾けることによって、これまで見過ごされてきたことを明らかにしようとしている。

本作と関わるこれまでの膨大な批評の流れを簡単に整理して、Martin Coyle は以下のように言う。

... Danson's discussion itself is part of a long tradition of allegorical or semi-Christian interpretations which see the play in terms of love and law, Old and New Testament, and which seek to establish the text more as myth or parable than as a site of conflicting changes in the early modern period. Paradoxically, such readings ... to Danson, we could add the perspectives of Nevill Coghill, Muriel Bradbrook, John Russell Brown, C.L. Barber as well as, to a lesser extent, most introductions to most modern editions of the play ... while recognising the play's complexity and even its contradictions, argue for an essential unity of idea, usually in terms of 'love's wealth' or the importance of giving and self-sacrifice. Paradoxically, too, such readings, although informed by a detailed knowledge of Elizabethan attitudes to usuary and Jews, often see Shylock, as we might expect, in terms of character or comic design. The focus of traditional readings tends to be upon Shylock's humanity or lack of it; or upon the mixed dramatic conventions that seem to shape his role, ranging from the devil in the medieval morality play through the Pantaloon of Italian comedy to the ogre of fairy tale. The traditional critic, that is, looks either at the moral or the dramatic impact of Shylock rather than at the historical or cultural significance of the play's representation of Jews (Coyle, 10-11).

従来の批評は、寓意やキリスト教的解釈を行なってきたと言える。これまでに編纂され出版された作品のテキストに付された序も含め、その集大成というべき結果が Lawrence Danson の *The Harmonies of 'The Merchant of Venice'* (1978) である。実際的には、従来の批評はシャイロックを喜劇的人物として捉え、シャイロックに人間性というものを見ようとしなかった。中世の道徳劇、イタリア喜劇の老いぼれた道化、お伽話の人食い鬼などといった役割を帯びさせる演劇的慣習に焦点を当ててきたのである。一方の新しい批評態度は作品が描くユダヤ人の歴史のないし文化的意義に焦点を当て論じる。新しい批評傾向の論考の編集を行なったコイルは、従来の批評傾向と新しい批評傾向を以上のように識別し、本作の内包するユダヤの歴史的、文化的な側面に、新しい批評は目を向けているのだと説いている。

小考では、しかしながら、この新しい批評態度（フェミニズム）が歴史のなかの女性の扱われ方を問題視するイデオロギーを偏重するあまり、作品の提示する人物象や人物関係を逸脱する見解を生んでいるということを指摘している。

- 4) 当時のエリザベス朝の観客が本作品のヴェニスをロンドンと読み替えたことは十分理解されることである。当時のロンドンには外国人が多く棲んでいて、ロンドン市民に職業的な脅威となっていた。James Shapiro によると、エリザベス一世治世の末期には、人口150,000人から200,000人のロンドンに、10,000人以上の外国人がいたということである (Shapiro, 162-3)。それが理由となり、反外国人暴動などが起きたと言う。Tretiak は

Anti-alien riots happened there three times at short intervals, in 1588, 1593 and 1595. The last time (1595) they came to a disastrous end: five of the riotous apprentices were hanged on July 24 on Tower Hill (Tretiak, 402).

と指摘し、当時の演劇界が反外国人暴動に目をつぶっておれなくなり、『ヴェニスの商人』が書かれることになったと主張する (402)。この指摘は、16世紀末に書かれた Anthony Munday 達の『サー・トマス・モア』(*Sir Thomas More*, 1593) にある以下の箇所と呼応している。

Lincoln. (reads) ... so it is that aliens and strangers
eat the bread from the fatherless children, and take the
living from all the artificers, and the intercourse from all
merchants, whereby poverty is so much increased, that
every man bewaileth the misery of other, for craftsmen be
brought to beggary, and merchants to neediness... (I. i. 111-16)
(自分の書いた訴状を読む) …余所者達が父親のいない子供達からパンを奪って食べて
いる。職人達皆から生活の糧を、商人達からは商いの取引を奪っているのです。それゆ
え、貧しい者達のはなはだしく増えている。一人一人皆が他の者の惨状を嘆いています。
職人達は物乞いとなり、商人達は一文無しになりはてているからです。

Lincoln. Then gallant bloods, you, whose free souls do scorn
To bear th'enforced wrongs of aliens,
Add rage to resolution, fire the houses
Of these audacious strangers. This is St Martin's,
And yonder dwells Meautis, a wealthy Picard,
At the Green Gate,
De Bard, Peter van Hollock, Adrian Martin,
With many more outlandish fugitives.
Shall these enjoy more privilege than we
In our own country?
...

それじゃ、勇ましいお前さん達、余所者達の押し付ける罪悪をあざ笑う闊達な魂を持つ
お前さん達、状況打破に怒りを加え、この厚かましい余所者どもの家を焼いてしまえ。
ここは聖マーティン教会、そして、あそこに金持ちのピカルディー人モーティスが棲ん
でいる。グリーンゲイトには、ドゥ・バード、ピーター・ファン・ホロック、アドリア
ン・マーティン達が沢山の田舎者の避難民達と一緒に棲んでいる。こいつらは俺達の国
で俺達よりずっといい目をみているではないか。

(略)

Clown. Use no more swords
Nor no more words
But fire the houses.
Brave captain courageous
Fire me their houses. (II. i.19-35)
もう剣もことばもいらない。やつらの家に火をつけろ。勇ましく勇敢な隊長、やつらの
家に火をつけてやれ。

Lincoln. ...
Fare you well all, the next time that we meet
I trust in heaven we shall each other greet. *He leaps off.* (II. iv.69-70)
(略)
みんな達者でな。次に俺達が会うときゃ、
天国でお互い挨拶をすることだろうよ。[リンカーン、台から飛ぶ]

ロンドンにおける異邦人の一つ、ユダヤ人の存在に関し、

For the members of Shakespeare's audience, Jews and Jewish customs would have been as foreign and as exotic as the setting of *The Merchant of Venice*. Because the Jews had been expelled from England by Edward I in 1290 'there remained in London only the *Domus Conversorum* or House of Convertites, occasional sojourners from abroad, and individual men of some distinction who had, as Christians, taken their place in English society' (Cerasano, 16).

といった Cerasano の指摘のように、特別な例を除いては、エドワード一世の時代にユダヤ人追放令（1290）が発布されて以来、オリバー・クロムウェルの時代、17世紀半ば過ぎにその再定住が議論されるころまで、ユダヤ人はイギリスにはいなかったという見方がなされてきた。しかし、Lucian Wolf (1934), Charles J. Sisson (1938),

This Portuguese Marrano circle in London... numbered at least eighty or ninety. This community was well enough established so that Salomon Cormano, the envoy of the Jewish Duke of Metilli, had no difficulties in finding fellow Jews to pray with during his embassy to England in 1592. Edward Barton, the English ambassador in Constantinople, complained to Lord Burghley in August 1592 that Cormano "and all his train used publicly the Jews' rites in praying, accompanied with diverse secret Jews resident in London." But there appears to have been no official reaction to this kind of accusation, even when made in English courts (Shapiro, 72).

と指摘する James Shapiro (1996) などの研究からシェイクスピアの生きたロンドンにユダヤ人の共同体が存在し、ユダヤ人が定住していたということが分かっている。シェイクスピアがユダヤ人と直接関わるがあった確率がそれゆえ高いと言える。ロンドンにおいてユダヤ人が日常的に活動し、シェイクスピアがユダヤ人を知っていたという時代的・社会的状況の下で本作品が書かれたことは確かである。

ロンドンにおける外国人は様々であったが、1540年、1550年代に大陸のアントワープで商人及び王室の代理人 Royal Agent として駐在したという商人 Thomas Gresham が1568年に、the Royal Exchange (1571年にここへエリザベス一世を招いたことからその名が付けられた) を建て、異邦人達がこの場所で貿易交渉を行なった (Howard, 29)。この場所の中庭は、商人達が集まり、取引をしたり相談をしたりする場所であったが、国別に場所が決められていた。ジーン・ハワードはそのような状況を、

As the French Protestant L. Grenade observed in 1576: "Each nation has its own quarter, so that those who have business with them can find them more easily. The English occupy about half the Exchange, and the French have their particular station too, as do the Flemish and the Walloons (ベルギー南東部のワロン人), the Italians and the Spanish. However, they are all at liberty to go hither and thither through the Exchange according to their need. Their letters can reach them there, and letter-carriers deliver [messages] to those to whom they are addressed. Here also one regularly hears the news of other countries and regions, which is a great convenience for those who traffick in merchandise across the seas" (Howard, 33).

と説明している。シェイクスピアがユダヤの異邦人を扱う背景にはこのようなロンドンにおける外国人のもたらしていた状況が存在したと言えそうだ。

- 5) ランスロット・ゴボーを正面から扱った批評は少ない。Kim Hall の 'Guess Who's Coming to Dinner? Colonization and Miscegenation in *The Merchant of Venice*' は、ランスロット・ゴボーが黒人女性を孕ませたということを、シェイクスピア時代のイギリスにおける異種族混交の問題と関

連付け、異種族混交は、イギリスが様々な国々と盛んに交易をするようになって生じたもので、それは当時のイギリス国民の独自性と文化について関心と不安とを呼び起こしたとする新歴史主義の研究。Steven R. Mentz の 'The Fiend gives Friendly Council: Launcelot Gobbo and Polyglot Economics in *The Merchant of Venice*' は Marc Shell が1980年代に始めた「新経済批評/the New Economic Criticism」の立場をとり、シェルの『ヴェニスの商人』論を批判及び補足する形で論じられている。ランスロット・ゴボーが主人を替え、ジェシカとロレンゾを結びつける仲介役をしたりすることが金銭の動きと連動し、金銭の動きないしは経済の在り方が、シャイロックとポーシャの二人だけに関わる形を崩し、多くのキリスト教徒に金銭が配分され、経済的な多極化がもたらされるとする論。

6) チャールズ・ニコルは

What is more interesting is his tendency to challenge prejudices against immigrant aliens. We have seen it in the 'More' fragment, and we see it even more in his portrayal of Shylock the Jew (Nicholl, 184).

と記し、外国人に対する反動が国会請願にまで高まり、人種偏見や反外国人の動きが常態化していた当時においてシェイクスピアが如何に倫理的に確固とした哲学を堅持していたかを強調している。市民の国会請願と暴動について、ニコルは

They [strangers] ought not to sell any merchaundizes by retayle. Contrary heerunto many of their merchaunts are retaylers also, keep shoppes inward, and private chambers, and therein sell by whole sale and retayle, send to everyman's house, serve chapmen, send to fayres, and utter their commodities many other ways ...

... There were many such petitions, never effectively addressed, and in 1593 anti-alien feeling was dangerously rekindled. It was a time of plague and war ... the long-running conflict in the Low Countries, the renewed threat of Spanish invasion. The economy was stretched, inflation was running high, bad harvests drove up food prices. In London the mood was ugly, and the strangers were convenient scapegoats. 'The common people do rage against them,' wrote one observer, 'as though for their sakes so many taxes, such decay of traffic, and their being embrandled in so many wars, did ensue.' (Nicholl, 105-6)

と述べ、外国人が様々な文脈からロンドン市民より攻撃される状況にあったことを注記している。

引用文献

- Aoyama, Seiko/青山誠子『シェイクスピアの女たち』研究社選書17, 研究社, 1987年/1981年初版。
 Auden, W. H., 'Brothers & Others', in W. H. Auden, *The Dyer's Hand and Other Essays* (London: Faber and Faber, 1964; first publ. in 1963), 218-37.
 Bate, Jonathan, *Shakespeare and Ovid* (Oxford: Clarendon Press, 1994; first publ. in 1993).
 Bible, the, Authorized Version, ed. John Stirling (London: The British & Foreign Bible Society, 1966; first publ. in 1954).
 Boose, Lynda E., 'The Comic Contract and Portia's Golden Ring', *Shakespeare Studies*, vol. 20 (1988), 241-54.
 Brown, John Russell, ed., *The Arden Edition of the Works of William Shakespeare: The Merchant of Venice*, repr. (London: Methuen, 1976; first publ. in 1955).
 Cerasano, S. P., ed., *William Shakespeare's The Merchant of Venice*, A Routledge Literary Sourcebook (London: Routledge, 2003).

- Coyle, Martin, ed., *The Merchant of Venice* (New York: Palgrave, 1998).
- Hall, Kim, 'Guess Who's Coming to Dinner? Colonization and Miscegenation in *The Merchant of Venice*', *Renaissance Drama*, vol. 23 (1992), 87-111.
- Howard, Jean E., *Theatre of a City: The Places of London Comedy, 1598-1642* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2006).
- Kishi, Tetsuo, ed./喜志哲雄編注『ヴェニスの商人』大修館シェイクスピア双書, 大修館書店, 1996.
- McEvoy, Sean, *Shakespeare: The Basics* (London and New York: Routledge, 2000), 142-49.
- Mentz, Steven R, 'The Fiend gives Friendly Counsel: Lancelot Gobbo and Polyglot Economics in *The Merchant of Venice*', in *Money and the Age of Shakespeare: Essays in New Economic Criticism*, ed. Linda Woodbridge (New York: Palgrave, 2003), 178-87.
- Munday, Anthony, and others, *Sir Thomas More*, eds. Vittorio Gabrieli and Giorgio Melchiori (Manchester: Manchester UP, 1990).
- Newman, Karen, 'Portia's Ring: Unruly Women and Structures of Exchange in *The Merchant of Venice*', *Shakespeare Quarterly*, vol. 38 (1987), 19-33.
- Nicholl, Charles, *The Lodger Shakespeare: His Life on Silver Street* (New York and London: Viking, 2008).
- Noble, Richmond, *Shakespeare's Biblical Knowledge and Use of the Book of Common Prayer*, as exemplified in the plays of the First Folio (New York: Octagon Books, 1970).
- Satoh, Atsushi/佐藤篤士『改訂 LEX XII TABULARUM — 12表法原文・邦訳および解説』早稲田大学比較法研究所, 1993.
- Schmidt, Alexander, *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*, 3rd edn., revised and enlarged by Gregor Sarrazin, 2 vols. (New York: Dover, 1971).
- Shapiro, James, *Shakespeare and the Jews* (New York: Columbia University Press, 1996).
- Shell, Marc, *Money, Language, and Thought: Literary and Philosophic Economies from the Medieval to the Modern Era* (Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 1993; originally publ. by the University of California Press in 1982), 47-83.
- Sisson, Charles J., 'A Colony of Jews in Shakespeare's London', *Essays and Studies* 23 (1938), 38-51.
- Tretiak, Andrew, 'The Merchant of Venice and the "Alien" Question', *The Reveiw of English Studies*, ed. R. B. McKerrow (1929)
- Wilson, John Dover, ed., *The New Shakespeare: The Merchant of Venice* (Cambridge: Cambridge University Press, 1975; first publ. in 1926).
- Wolf, Lucien, *Essays in Jewish History*, ed. Cecil Roth (London: The Jewish Historical Society of England, 1934), 71-90: 'Jews in Tudor England'.

Reconsidering Portia in *The Merchant of Venice*
(Tadaaki Noguchi)

Portia is interpreted by feminist critics such as Karen Newman (1987) and Lynda Boose (1988) as a superbly subversive woman: as a disguised judge, she rescues men in a pinch and unfetters them from disgraceful situations, but she takes them under control using her wits and money.

This paper reconsiders this interpretation of the female character by paying attention to the clown Launcelot Gobbo, who first serves Shylock the Jewish money lender and later changes his master to Bassanio, a bankrupted Christian aristocrat. Although he is at the bottom of society, Launcelot feels morally tormented in changing his master from the Jew to the Christian, oscillating between his conscience, which inhibits him from discriminating against his Jewish master and tries to prevent him from moving out of the Jew's household, and the 'fiend' in himself, which pushes him to move out to serve the Christian (II. ii).

Unlike Launcelot, socially higher-ranked people like the Duke of Venice, Portia, Bassanio, and Gratiano do not show any sign of guilt, despite of the fact that they treat the Jew like social scum, knowing that Shylock bears a bond justifying his demand of a pound of flesh from Antonio. Since the audience sees that Launcelot shows a pang of conscience about changing his master from the money lender to the Christian, debating whether or not he should discriminate against the Jew, it expects those characters to have the moral fiber to judge whether what they do is right or wrong morally and legally. Yet the actual case is opposite.

The fact that the servant feels guilty about his discrimination against the Jew clears up the ambiguities about the actual situation of discrimination, particularly discrimination against Jews, at the time of Shakespeare. This can lead the audience to think that Shylock is treated very unfairly, since he has the bond to justify himself. Portia cannot go beyond the law of Venice mentioned by Antonio at III. iii. 26-31, yet as a disguised judge, she ignores Shylock's bond and makes him a criminal, depriving him of all his legal rights and possessions. As a result, she frees all the male Christian characters from their disgraceful plights: the Duke recovers himself as the highest authority in Venice; Antonio again becomes an innocent merchant with no debt; other men like Gratiano, Salerio, and Solanio are then free as Christians to discriminate against the Jew as before.

Although many viewers, including most feminists, interpret Portia's role as an heroic endeavour to do good to all those Christian people, her actions were actually taken for the sake of her desired husband, who originally created the problem for Antonio, who borrowed a large amount of money from Shylock for her husband's sake. She was, in other words, made use of by the male Christian society of Venice. What she has done cannot be justified in any sense. She has destroyed a good opportunity for socially marginalised people like Shylock to be able to demand what they are legally entitled to receive. She has done what feminists hate to do. Thus, the perspective of the conscience of Launcelot Gobbo produces a new and just view of Portia and draws the audience's attention to Shakespeare's real view on anti-Semitism.